

【シンポジウム連動報告】

デカルトの「音楽論」から中世的学問論を観る

明治学院大学 名須川 学

本報告は、シンポジウム企画委員会からの要請に即した形で行うこととなったため、その論旨に重大な瑕疵(飛躍)があることを予めご了承頂きたい。というのは、当初企画委員会から打診があった際、昨年度より行われている「中世の自由学芸」に関する内容との連動において、特に数学的諸学科(Quadrivium)の「音楽 Musica」に関する提題者がなかったために、急遽、報告者に対してデカルト的学問方法論と「音楽論」との関連性について論じて頂きたいと要望があったのではあるが、そもそも中世的学問論全般とデカルト的学問方法論とが「断絶」しているということは、哲学・思想史研究の現在にあっては、むしろ「所与」あるいは「前提」であって、その「断絶」を学会の連動報告として論じることに果たしてどれほどの学術的意味があるのか、報告者の理解を超えているからである。(報告者自身は無意味であると考えてる。)

そうではあれ、この様にして与えられた問題に対し、それに正面から答えることには如何なる障碍が伴うのかということ、そのこと自体について答えることは、中世的学問論とデカルト的学問方法論との懸隔を埋め合わせるためにはどれほど多種多様で複雑な知の有機的連関を捉えねばならないのか、また、そのことを捉えるにあたって、これまでの通史的理解のあり方では全く太刀打ちできないということを再認させ、必然的に、現在の我々が持ち合わせる哲学・思想史研究の方法論そのものへの反省を促す契機となるかもしれない。本報告が学術的に積極的な意義をもつとすれば、おそらくこうした犠牲的公開実験の役割を負うということのみであるように思われる。

実際、既述の「懸隔」を埋め合わせるために最低限検討しなければならない主題を今この場で思い付く限り列挙してみれば、自ずとそれは明らかになるであろう。

(1) そもそも、昨年からの連続シンポジウムにおける各提題者からの報告によって浮上している通り、教科書的な通史においては「七自由学芸 *Septem Artes Liberales*」が、あたかも七つの学芸(文法、修辞学、論理学、算術、幾何学、天文学、音楽)が統一的な体系として成立していたかの如く理解されているにも拘らず、その実態は時代と場所によって多様であり、また、必ずしも「七つの」学科全てが学ばれたわけではないということ。

(2) そうであるにも拘らず、初期近代に至るまで「学問論」が論じられる場面においては、殆ど常に「七つの自由学芸」が掲げられている事実があり、少なくともデカルトがラ・フレーシュ学院において受けた教育カリキュラムは明確な「七自由学芸」ではなかったにも拘らず、初期の未完の遺稿『規則論』における「普遍数学」に関係して記された内

容には、あたかも「四科 Quadrivium」を暗示させる表現が見られること。

(3) この「四科」に関連して、やはり通史的理解では「機械的諸技術 Artes Mechanicae」は奴隸的職人的技術として貶められていたとされるものの、実際には「数学的諸学科」と並んで教授されていた事実があり、「自由学芸」における所謂「数学」と所謂「機械学」とは何らかの内在的連関をもっていたために、これがデカルトを含めた初期近代において決定的な転換(変質)を果たした結果、所謂「機械論哲学」が誕生することになるということ。

(4) 今回のシンポジウム企画において根本的に欠落している観点として、「中世的学問論」と「デカルト的学問方法論」の間に所謂「ルネサンス的学問論」が介在するという。もちろんここに言う「ルネサンス的学問論」の内実は複雑であるが、少なくともその一つの思想史的系譜として、例えば、16～17世紀には、大学におけるアリストテレス＝スコラ主義に対抗する勢力としての魔術・錬金術・カバラを中心とする新たな知の枠組みが成立している。そして実際、17世紀前半にこの新たな知の枠組みを全面的に押し出した「薔薇十字運動」が起こり、デカルトの知人であったマラン・メルセンヌが徹底した攻撃を繰返していたと同時に、デカルトその人の手記の中にも、極めて簡潔にはあるが、この所謂「ルネサンス的学問」の原理に関する記述が明確に見られるということ。

(5) この所謂「スコラ的学問」と所謂「ルネサンス的学問」との闘ぎ合いにおいて、デカルトとメルセンヌは「数学」の位置付けを巡る遣り取りを行い、その結果、前者は『方法序説および(数学・自然学における)3試論』(1637年)、後者は『普遍的ハルモニア』(1636～7年)に、各々の立場から競うようにして学問論を結実させることとなる。その際、この両者の間に共有されていたはずの「数学」の概念の内実がそれぞれ互いに異なっているということは重要な事実である。実はこの「数学」に関する相対立する概念は、中世的学問論の中においては「数学」概念の二重性(二層性)として自覚され保持されてきたものであった。このことはまた、「ルネサンス学問論」の系譜に属する「建築論」・「絵画論」における「比例論」、そして、これと深く相関する「音楽的コスモロジー」の問題に直結するのではあるが、それそのものはまた、優れて「中世的学問論」のあり方に淵源しているということ。

これ以外にも、「懐疑主義」・「(キリスト教)神秘主義」・「ストア主義」・「無神論」等々の問題(加えて、「天文学」や「医学」等々における所謂「科学史」上の発見)は、各々初期近代に現れた特徴的な思想的主題であるが、これらを排除し不問にした上でデカルト哲学に至ることは暴挙と言えよう。

だが、時間的制約の課された中で以上の諸主題全てにわたって説明した後、改めてデカルト的学問方法論まで漕ぎ着くことは、不幸にして報告者の能力を遥かに超越している。

(加えて、報告者は長期的な傷病療養のため、今現在、学術活動を停止しており、本報告にあたって先端的学術成果を採り込むにも自ずと限度があるということをご了承願いたい。)

そうではあれ、企画委員会から要請のあったこの任を全うするためにも、まずはデカルト初期思想の断片に垣間見られる彼が対峙していたであろう諸主題に眼を向け、そこから遡って「中世の自由学芸」に通底する問題を逆照射し、翻ってそれが初期デカルトの「音楽論」に扱われる本質的問題と如何にして切り結ばれることとなるのか、という点を浮き彫りにすることをもって当初の要望に応えたい。